

## 日本文学は誰のものか

### —芥川賞受賞作にみるボーダーレス—

台湾大学 范 淑文

2021年165回芥川賞は石沢麻依さんと李琴峰さんというダブル受賞であった。今回の台湾人李琴峰さんの受賞は、中国出身の作家楊逸さんに続き、日本語非母語話者としては二人目の受賞であり、台湾人としては初めてであるため殊に注目されている。その理由は、日本の文壇で既に大変活躍している女流作家温又柔さんの存在があるからだと言える。具体的には李さんは15歳で日本語を習い始め、23歳で日本に渡り、まだ8年しか経っていない、など温さんと極めて異なる点が挙げられる。

さて、このような日本語の学習歴も日本での在住歴も長くない状況下にもかかわらず李さんが見事に文学最高賞を受賞したのは、まず日本文学がもはや日本人作家だけのものではなくなったことを意味していることは改めて言うまでもない。では、受賞できた非母語話者である李さんの日本語による文学創作の意義、また受賞作である『彼岸花が咲く島』という作品の魅力はどこにあるのか、興味深い点である。

本発表では、非母語話者作家李さんの文学創作の意義、また受賞作『彼岸花が咲く島』の創作における言語の使用やキャラクター作りの工夫、さらに作品に歴史を織り込んだことなどについて考察しながら、日台の文化交流や融合がどのように図られ、それによって如何なる効果が果たされたのか、などを解明してみるのも本発表の主旨の一つである。